

第3章 長岡地域におけるケーススタディー

本章では新潟県長岡市長岡地域を対象に、都市と寺院の関係をいくつかの点から分析した。

まず、長岡地域の寺院の概要を立地状況から把握するとともに、寺院関係者へのヒアリングを行い、檀家数の変動や将来の見通しなどを把握した。

つぎに、長岡地域の寺院を景観的に分析した。2章3項での寺院の景観論を受けて、長岡地域に見られる寺院の景観から景観を構成していると考えられる要素を抜き出し、その特徴を記述していった。そして、長岡地域において、寺院がどのような景観をつくりだし、どのように都市環境に貢献しているのかを分析した。

また、施設分布と面積という観点から、他の都市施設との比較を行った。

3.1 長岡地域の寺院

3.1.1 長岡地域の寺院の概要

長岡地域にある寺院の総数は、現在およそ150寺である。下の図はその分布を示したものである。分布としては大まかに、旧長岡城趾(現在の長岡駅)の周辺に形成された寺町、周辺集落や街道沿いの村落内、長岡地域周縁部の山中・山裾、の3タイプに分けられる。宗派としては、真宗と浄土真宗が多数派で、他には真言宗、禅宗、日蓮宗などがある。天台宗、法華宗、時宗は数少ないが存在する。宗派別の分布を示したものが(図2)である。

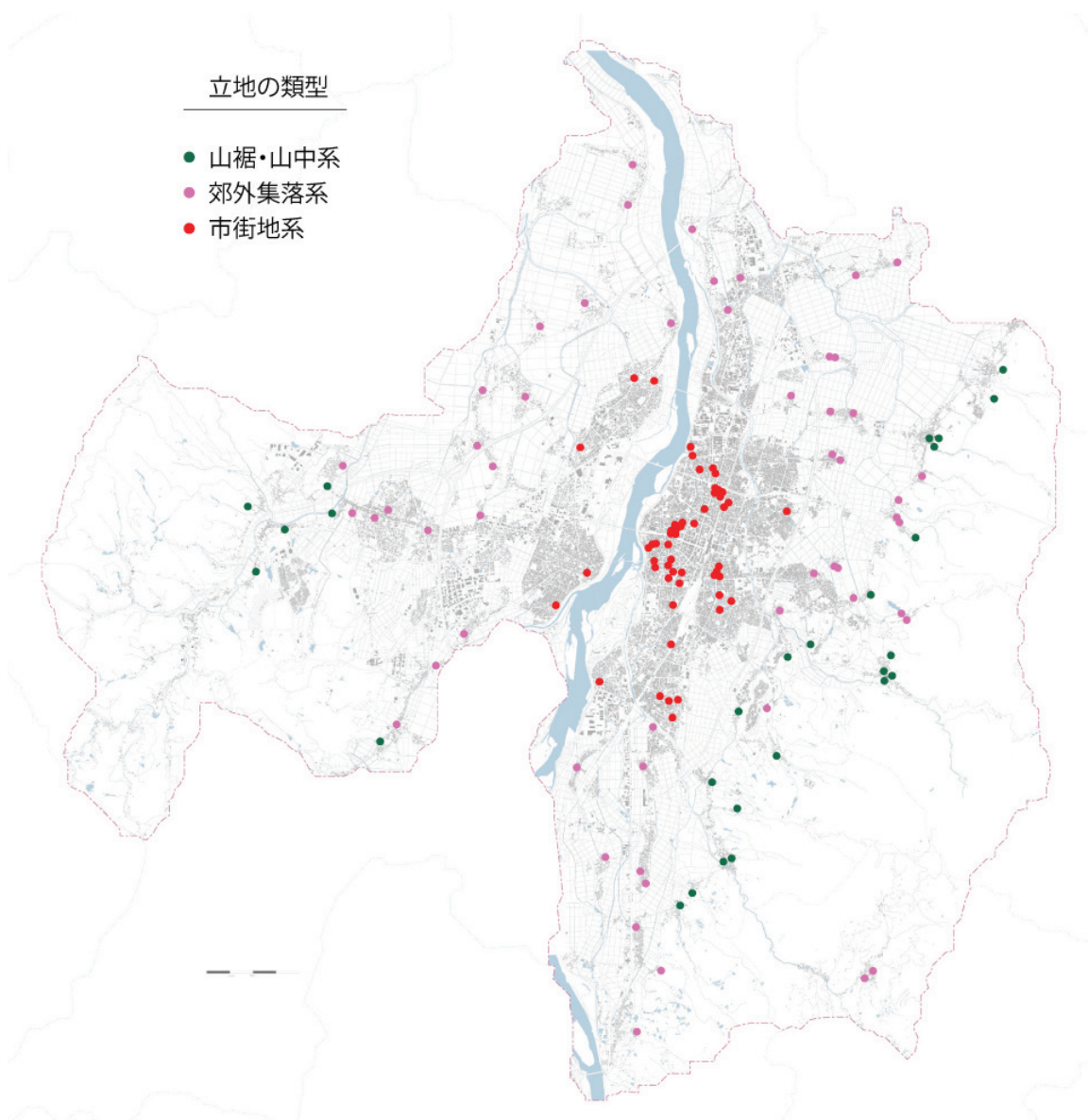


図1. 長岡地域の寺院分布

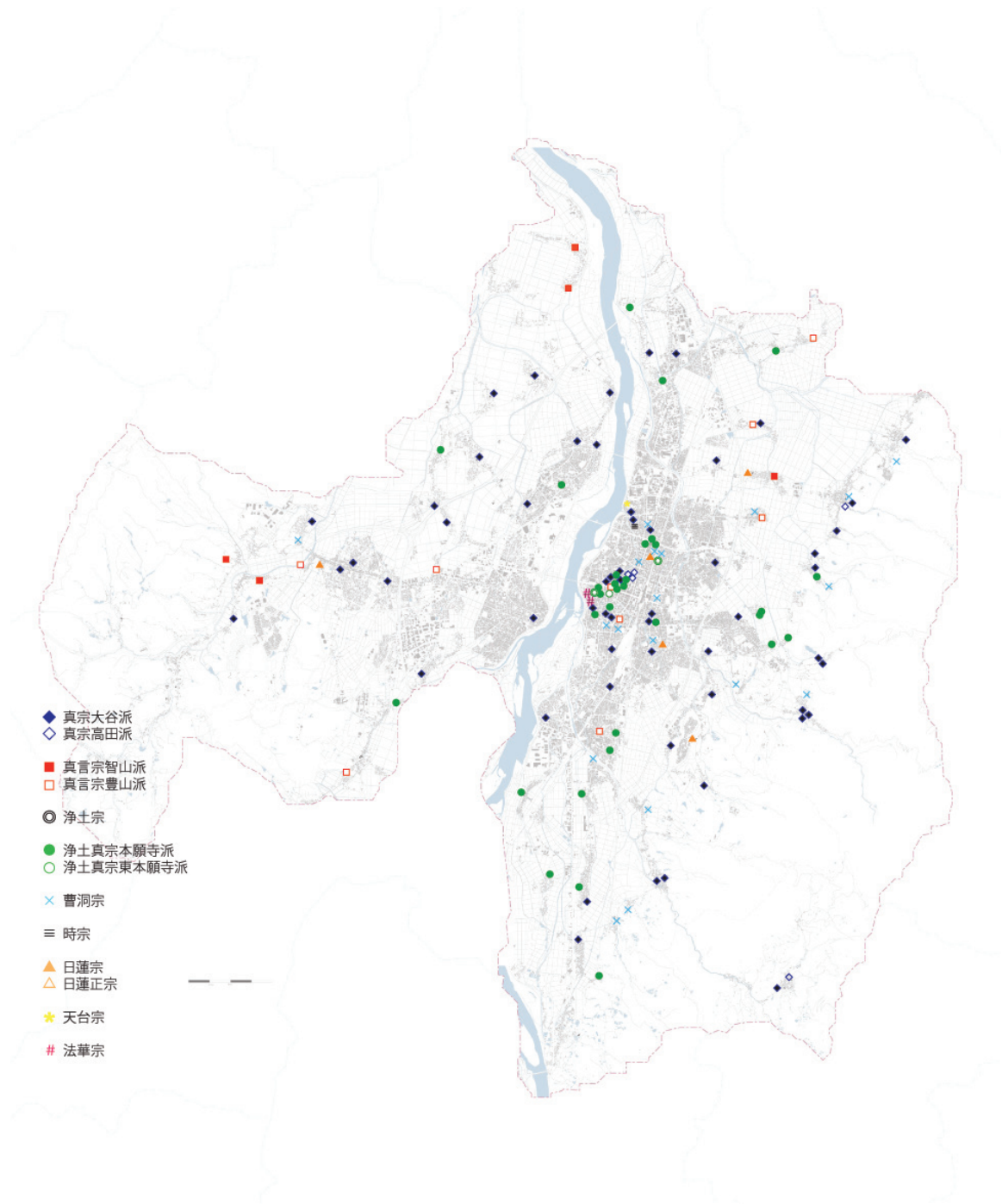


図2. 長岡地域の寺院分布(宗派別)

各寺の歴史をひもとくと、長岡地域の寺院は14世紀、15世紀の中世頃に建立されるようになったことがわかる。武家の菩提寺として山寺付近に建立される禅宗系寺院、農村に拠点をつくり勢力を広げていた真宗系寺院がまず各地に建てられた。16世紀はじめに現在の長岡城跡を中心として城下町が形成された際には、市街地西方の柿川に沿った一帯が寺町となり、また東方の栖吉川沿いと市街地の北郊にも寺院が配置された(図3を参照)。(図2)の分布をみると、城下町の形成にともない浄土真宗系寺院が多く建立されたことが推察できる。

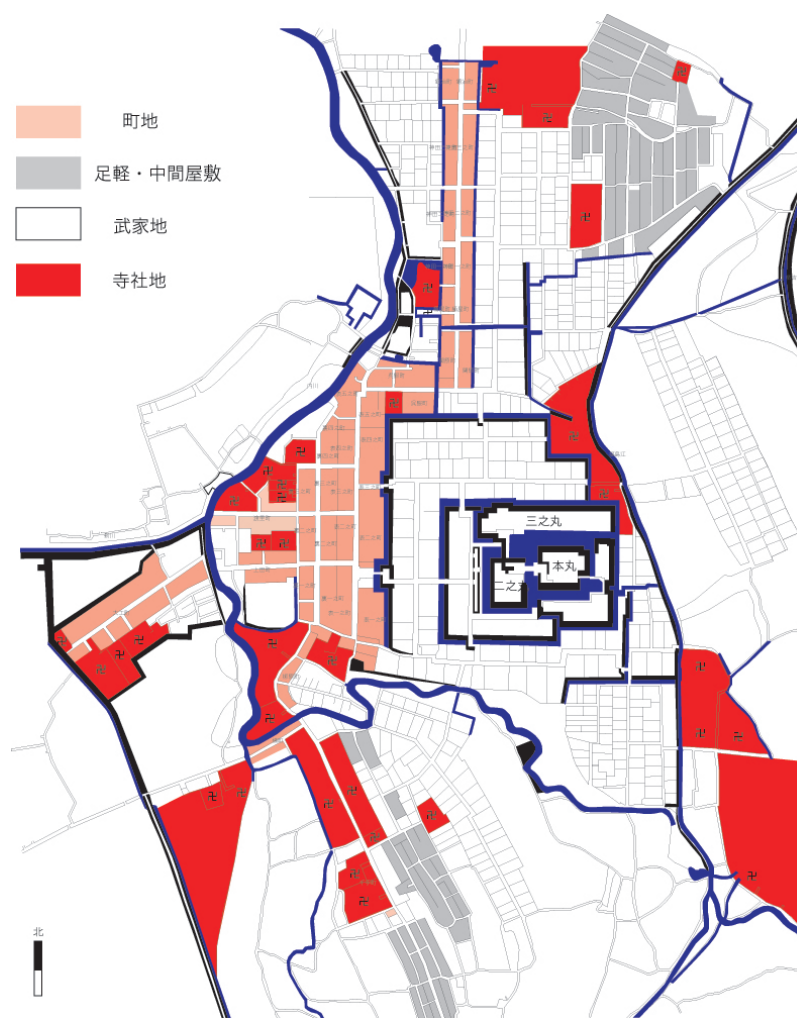


図3. 長岡城下町の寺社地
(「慶応年間 長岡城下町絵図」より作成)

長岡地域内で寺院に関係している名所、名跡を、以下の図に示した。寺院は、長岡地域の歴史や文化の観光地と関係しているものが多い。歴史上の重要人物の墓所や、戦争に関する史跡、などである。また、仏像などは文化財に指定されているものもあるが、その他にも各寺に様々な仏像が祭られている。また、新潟市の景観事業である「越後長岡百景」では、長岡地域で寺院に関係する景観が2カ所選定されている。

その他にも、ここでは取り上げなかったが、「越後三十三ヶ所観音霊場」の札所など、巡礼地として知られている寺院等も存在する。



参考:

長岡市ホームページ内、観光ページより(<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kankou/rekishi/>)

新潟県ホームページ内、観光・イベント、越後長岡百景の紹介(http://www.pref.niigata.lg.jp/nagaoka_kikaku/hyakkei.html)

3.1.2 寺院の規模・伽藍の構成・立地

次に、長岡地域の寺院を、規模、伽藍の構成、立地条件から、類型化した。

a. 大規模な寺院

大規模な境内をもつ寺院は、特に中心市街地に多い。これらの寺院は、山門の前後に長い参道を持ち、本堂と庫裏、鐘楼、その他祠や宝物殿などからなる伽藍構成をもつ。

境内にはオープンスペースがあり、敷地内の緑も豊富である。墓所も広く、何らかの史跡や墓碑が建てられていることもある。そのため境内の公共性は強く、一部が公園化している場合もある。また、境内に神社が含まれていることもある。

代表的な寺院：極楽寺、本妙寺、栄涼寺など



a1. 上空からみる中心市街地の大規模寺院



a2. 境内に併設された神社



a3. 境内の一部にある公園



a4. オープンスペースの豊富な境内



a5. 参道



a6. 広い墓所

b. 中規模の寺院

中規模の境内を持つ寺院は、中心部の住宅地内や郊外地域に数多くある。その規模や伽藍構成などには多くのバリエーションが見られる。

中心部に立地する寺院は周辺を建物に囲まれていることが多いが、参道や山門、石柱をもち、街並に対して寺院であることを明確に示している。境内にはオープンスペースがあり、緑地環境にも貢献していることが多い。

郊外地域では、境内の自然環境はゆたかで、敷地自体が屋敷林のように緑に囲まれている場合が多い。

いずれも、なんらかの墓碑がある、広い墓所を持っている、などから境内の開放性はあると言える。神社が併設されていることあるが、祠やお堂などを持っている場合が多い。



b1. 中心部の寺院・山門



b2. 中心部の寺院・周囲を囲まれた境内



b3. 中心部の寺院・緑地が担保されている



b5. 境内の祠



b4. 郊外の寺院・参道と石柱・山門の構成



b6. 郊外の寺院・山門



b7. 郊外の寺院、自然とオープンスペース

c. 小規模の寺院

小規模な寺院は中心市街地にいくつか存在する。このタイプは境内には本堂、庫裏、墓所、鐘楼といった伽藍の基本構成を備え、敷き地の大きさという制限がある意外は、中規模の寺院と変わらない性格を有していると思われる。

小規模寺院の多くは住宅街に立地しているため、山門のような明確な境界要素を持たない場合が多い。山門にかわって入り口の石柱によって、入り口であることが示される。参道はなく、石柱をすぎると正面に本堂、側面に庫裏と墓所がある。オープンスペースは少なく、本堂前の空間が駐車場を兼ねている場合もある。



c1. 奥に本堂がある



c2. 石柱を入ってすぐに本堂入り口

d. 前寺

前寺とは、本寺の境内にあり、本寺に付属する子院のことである。塔頭、脇寺とも呼ばれる。このタイプの寺院は、本堂があるのみである。本堂の建物に住職の住宅は併設されている。墓所は本寺内に含まれていることが多い。

境内の空間はほとんどなく、一般の建物と同様の敷地、奥行きである。外観も、寺院というよりは一般住宅に近い。



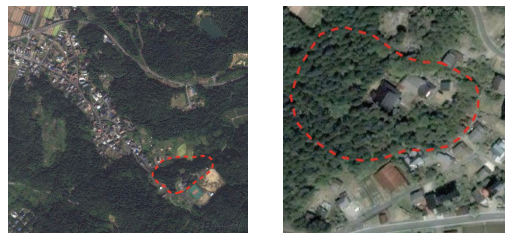
d1. 住宅街の前寺



d2. 一般住宅のような外観

e. 山裾、山の中の立地

a～dは、寺院の規模をもとにした分類であった。長岡地域のほとんどの寺院は前述の分類で見ることができるが、山裾や山の中に立地する寺院は平野部に建つ寺院とは異なる特徴をもっている。



e1. 上空からみた山の中の寺院

山裾、山中寺院の立地は、e1を見ると分かるように山の中である。集落の境界から、山の中へと続く参道がのびる。参道を上がっていくと山門があり、その更に奥に本堂や庫裏がある。そして墓所は本堂を囲む山の中に、不規則に立ち並ぶ。



e2. 山の中へと伸びる参道

このタイプの特徴は、視覚的に明確な境界線を持たないことである。平地にある寺院は、山門や石柱による入り口の明示、本堂等の建物による視覚的認識、などによって、寺院であるとわかる。しかし、山裾、山の中の寺院は、周囲からは見えない。山の中へと続く参道が1本示されているだけである。



e3. 周囲からは山しか見えない

長岡地域では、禅宗系寺院にこのタイプが多く見られた。中世に山城と共に寺院が建てられたことや、中世では密教の思想を体現するために伽藍を自然の中に拡散させる山寺が多く建てられたことなどに関係した寺院形式である。



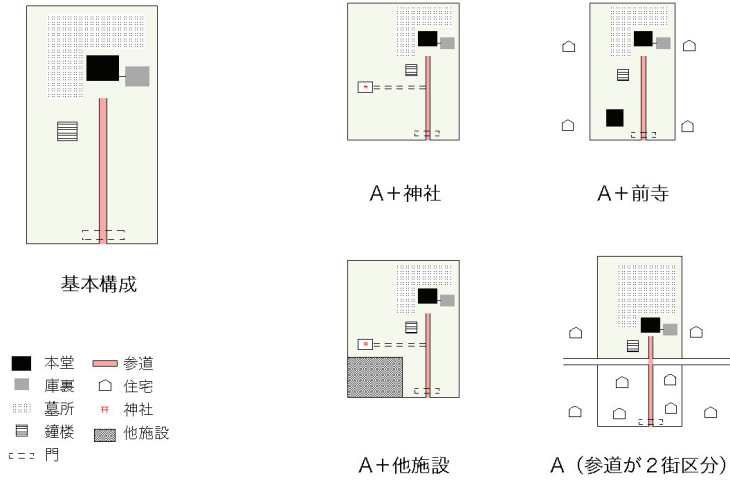
e4. 自然の中に墓が建っている



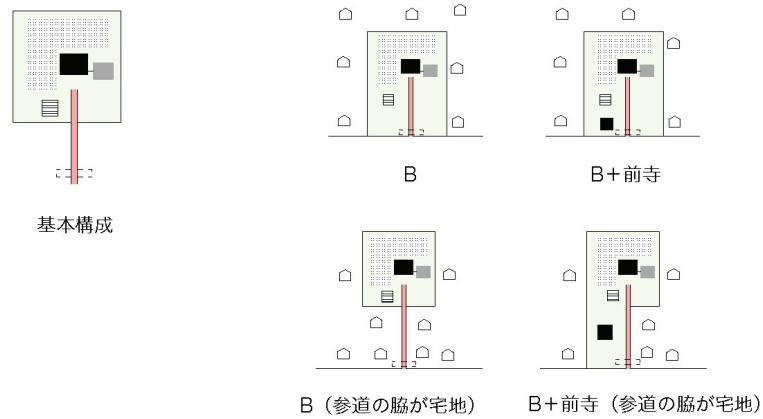
e5. 本堂

<寺院境内の構成の種類>

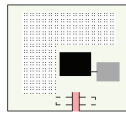
A. 広い境内+伽藍+参道



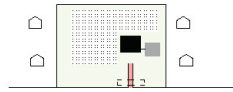
B. 中規模境内+伽藍+参道



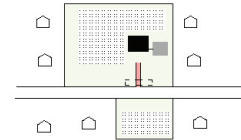
C. 小規模境内+伽藍



基本構成

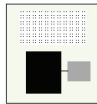


C

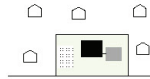


C+別地に墓所

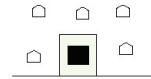
D. 前寺



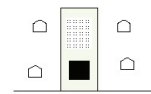
基本構成



D

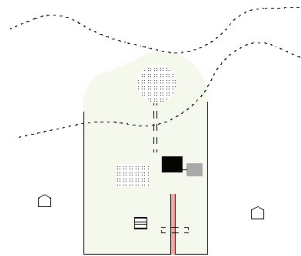


住宅と同規模

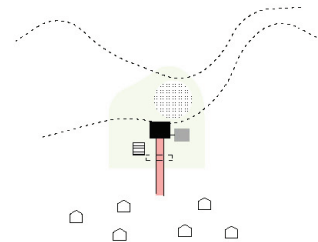


本堂と墓所

E. その他、自然に内包される敷地



山を背負った立地+墓所が山の中



山の中

3.2 長岡地域の寺院の現状

次に、長岡地域の寺院の現状と将来の見通しを把握するため、将来人口推計と宗教年鑑の統計を用いた檀家数の予測、および寺院関係者へのヒアリングを行った。

3.2.1 将来人口推計から予測する檀家数の減少

以下は、現在把握している宗教年鑑¹の統計から、およその目安としてこの地域の信者数を算出したものである。(あくまで目安としての仏教系信者数として概算であり、檀家数とした場合にはこれより人数が減るものと考えられる。)

長岡地域の仏教系信者数を新潟県の人口に対する仏教系信者の割合をもとに試算した。長岡地域の人口195,681人に対し、54.5%の106,646人が仏教系の信者であると仮定する。また、世帯人員数が平均2.92人であるので、仏教信者の世帯数は36522世帯と仮定される。以上から、現在長岡地域では寺院1軒に対して711人(243世帯)の信者がいる計算になる。

この試算をもとに、将来の檀家数を見積った。まず、2050年に長岡地域の人口は2005年の195,105人から76.4%減少した149,144人となる。(2008年度の伊藤友隆による修士論文²より、長岡市の将来人口の推計(封鎖人口の場合)を参考とした。)したがって、総人口に対する信者の割合が変わらない場合、単純計算で1軒の寺院に対する信者数は人口減と同じ割合だけ減る。現状維持の経営だとすると長岡地域では寺院の総数の約24%が檀家の減少により経営難に陥ると予測できる。2050年における市街地のコンパクト化と人口流動を考慮すると、寺院の統廃合が行われ、寺院数は現在の3/4になる可能性がある。

¹ 「宗教年鑑」文部科学省HP内 宗教統計調査 統計表一覧より
(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001061246>)

² 「ストック、フロー別CO2評価システムを用いた低炭素都市像の研究」伊藤友隆, 2008年修士論文

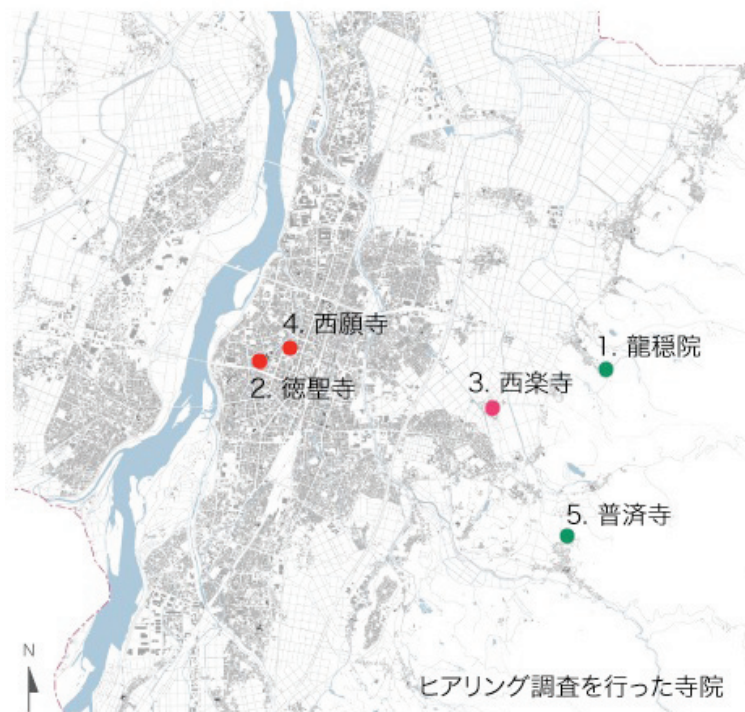
3.2.2 寺院関係者へのヒアリング

第2章では日本人の宗教心の低下と寺院と人々の関係の希薄化について述べたが、実際の状況はどうであるのかを知るために、長岡地域の寺院関係者に、現在の寺院の状況と地域社会とのつながりに関してヒアリング調査を行った。

調査期間は、2010年11月8日、9日、10日の三日間。

調査対象は、長岡市の寺院、計5寺である。以下の図に示す通り、中心市街地に立地する寺院2寺、郊外地域に立地する寺院3寺(そのうち1寺は集落内に立地、1寺は山裾に立地、1寺は山の中に立地する寺院)である。

主な質問項目は、寺院の由来と歴史、現在の檀家の状況、地域社会とのつながり、寺院の存続に対する展望、である。



なお、この調査は、長岡市都市整備部まちなか整備課の田村均課長補佐の同行及び協力を得て行われた。また、各寺院関係者との連絡は、慶徳寺及び普濟寺住職の金子氏の協力によるものである。

ヒアリング1. 安楽山 梅樹林 龍穩院

宗派：曹洞宗

所在地：長岡市乙吉町3316

ヒアリング対象者：住職 櫻井統一氏

調査日時： 2010年11月8日

—お寺の由来

源義家公の若宮の菩提のために、密宗(真言宗)の安楽寺として1447年に建立された。その後、1473年に、厚木の松石寺の末寺として、禅宗の龍穩院として開山。鬼兒島弥太郎が入道し、その遺言によって乙吉城(山城の類い)の下に移転。乙吉の地は栃尾への最短ルートの途中にあり、現在の山の尾根(南側)には道があったという。1742年に本堂が焼失した後、1745年に現在の本堂が建立した。

—檀家について

檀家数は100軒ないくらいである。内訳は、乙吉町付近の住人が1/3、旧長岡市内の住人が2/3である。経営的には苦しい人数である。

檀家の宗教心は、戦前／戦後、震災前／震災後の2度で、かなり変わった。例えば葬式のやり方では、禅宗では本坊の他に3人程の人員を要し、丁寧なものだと6人くらいで執り行う。だが戦後は、旧来の形式に乗っ取って行われる事が少なくなった。檀家としては、人員が多いと費用もかかるので、なるべく経費を押さえたいという心理。震災後も同様に、各自の生活の立て直しが最優先とされる中、宗教に対する出費は減っている。

—地域社会とのつながり

近世まで遡ると、寺は特に武士との結びつきが強かった。また、檀家と菩提寺といった関係ではなく、近隣の部落民とのむすびつきが強かった。義家公若宮の墓所は、ワカミヤサマと呼ばれ、大正時代までは祭礼も行われていた。

また昭和の頃は、近隣の子供の遊び場であったり、寺院の行事には檀家以外の参加も見られた。特に、お釈迦団子の行事では、子供達も一緒に托鉢に練り歩いた。境内に縁日のようなものが開かれたという。

現在は、涅槃会、大般若などの行事は行われているが、子供の参加などはほとんど見られない。

—寺院の存続に関して

立ち行かなくなってくると、兼務住職が増えるだろう。つまり、同じ宗派の寺2つを、一人の住職が面倒見る形である。また、檀家の減少だけではなく、少子高齢化や、地域社会の希薄化には非常に危機感を抱いている。今のままでの寺院のあり方では、この先困るであろう。しかし、曹洞宗

は長らく世襲制ではなかったこともあり、どのようにしていけばよいのかは模索中である。また、建物を文化財として、保全や改修に対する公的助成を行う仕組みをつくらなければ、お寺の建物を残していくのは難しい。

―建築について

1745年に現在の本堂が建立された。昭和35年に石段、本堂の改修が行われた。また、平成元年には屋根を瓦から銅板へと吹き替え、基礎も造り直した。2004年の新潟県中越地震で本堂が被害を受けた。が、その前の改修のおかげで被害は少なくて済んだという。

本堂は禅宗寺院特有の方丈形式であり、昭和60年に発表された「近世社寺建築緊急調査」では、長岡近郊では2番目に古いものであるとされている。

大縁には八角柱が3本建っている。本堂は西向きであり、南面していないこと自体が、古い形式であることを示している。北向き観音：涅槃の時に、北枕、右向き、心臓が上で、顔が西方浄土を向いているということから、古いお堂は西向きで、北向き観音が置かれる。

禅寺の庫裏は、修行の場の一部である。従って台所も、檀家や僧侶の共同のものとする。

ヒアリング2. 金色山 正智院 徳聖寺

宗派：真言宗

所在地：長岡市上田町2-25

ヒアリング対象者：住職 中村啓識氏

調査日時：2010年11月8日

—お寺の由来

天平8年に行基が北陸を巡回した際に、薬師寺信仰の拠点として蔵王に薬師堂が建てられた。その後、弘安5年(1282年)に蔵王から現在の上田町に移る。

—檀家について

昭和20年頃は150軒程度であったのが、現在は400軒ほど。団塊の世代等、人口の増減に直接影響を受けていると考えられる。檀家数増加のピークは昭和50年代で、一年に5軒から10軒の増加があったという。しかし、現在の檀家の様子からは、20年後には檀家数は半減するだろうとの予測である。

—地域社会とのつながり

かつて建っていた薬師堂は、近隣の人々の憩いの場であった。薬師堂そばにケヤキの木があり、夏場などは親子連れが涼みにきたり、近隣の子供達が境内で野球をするなど遊び場でもあった。また、町内会との結びつきも強かった。薬師如来は町内の守り本尊として、地域の祭りなどにも関与した。祭りの際は境内に芝居小屋などがたつたという。また、新潟県八十八カ所では、61番目の札所である。戦後は、地域とのつながりは薄れつつあるものの、本堂で町内会の新年会が行われる、などの関わりがある。

一方、寺院が開放的になれない理由としては、仏像や賽銭の盗難がある。この地域でも被害があり、普段は本堂の鍵をしめている状態である。

—寺院の存続に関して

現在は近所づきあいが減少したことや、葬儀にお金をかけたくないなどの理由により、家族葬、直葬といった形式も増えた。だが、寺が葬式と関係するのは近年になってのことである。

寺の活動は、寺の中だけのことではない。新潟県少年院、長岡西病院、といった施設での活動は、宗教の本質的な活動のひとつである。また、市の選挙運営、学校の後援会、などを通して地域社会に貢献する方法もある。檀家数の減少は目に見えているが、寺院の存続に関しては悲観はしていない。

ヒアリング3. 妙慶山 西楽寺

宗派：浄土真宗本願寺派

所在地：長岡市千代栄町11

ヒアリング対象者：住職 春日浩三氏

調査日時： 2010年11月9日

—お寺の由来

元亀元年(1570年)、浄慶坊によって開基された。新潟県の、特に浄土真宗はほとんどがこの前後に出来た。戦国時代を経て、国が非常に乱れた時、民衆が立ち上がったときであり、武士が一族郎党を連れてやってきて、出家したり菩提寺を建てたなどしたため。浄慶坊は一向一揆で破れた後、上越の浄興寺で出家した。どうして千代栄町の地域にやってきたのか、この地区の信者のために浄慶坊が使われたのかどうか、そのあたりは定かではない。

—檀家について

檀家の数は大体370軒くらい。だが、東京へ行ってしまう人が増えた。また、結婚しない人が2割ほどおり、この代でお墓が絶えてしまうという状況が散見される。檀家数は、檀家が引っ越したり、周囲に新規宅地開発があつたりすると、変動する。

東京にいる檀家は、7月に一括して回っている。東京では人口に対するお寺の数がとても足りていないので、未だに長岡のお寺が菩提寺という人も多い。

—地域社会とのつながり

西楽寺では、雅楽同好会を主催している。これは明治33年に、農村の休耕期に青年の健全育成のために始まったものである。当時、焼失した本堂のふすま絵を描く絵師が何ヶ月も泊まり込んで絵を描いているときに、青年に雅楽を教え始めた。当時は長男だけという制限がついていたが、今は誰でも、どこの地域の人でも参加できる。昔は女人禁制だったが、今は女性の方が多い。また、10年ほど前に長岡雅楽愛好会という姉妹会が出来、サラリーマンから自営業の人まで様々な人が参加している。練習は月二回、夜7時から9時まで、本堂で行われる。雅楽をお寺で演奏する機会は法要(大法要などの行事や結婚式等)の時だけで、鑑賞目的ではない。雅楽は喜怒哀楽に関係ないので、お寺の行事(ハレ)の場で演奏できる。また、小学校や社会福祉施設などでも披露することがある。西楽寺吹奏楽会もあり、神事、寺院法要での奏楽が行われている。その他にも、外部の団体を招いて、本堂での演奏会なども行われている。今年の夏には京都の女子大のコーラス部が来た。

行事では、報恩講(親鸞上人のご命日の寺参り)がある。本来は地域全体で行う祭礼だったが、今は檀家だけになってきた。初産式(しょざんしき)もやる。これはお宮参りのようなもので、その一年に生まれた新生児を祝う行事。長岡市花まつりには、市の仏教会で準備にあたり、お稚児

さんを出すなどしている。これは100年程前にドイツで日本人が始めたもので、クリスマスに対抗したお釈迦様の誕生会である。これは宗派を超えて行われている。その他、灌仏会、釈迦降誕会なども行われる。除夜の鐘も地域の人がやってきてついている。

また、昔は子供がたくさん来て境内で遊んでいた。ラジオ体操も行われていた。今も、昔程ではないとはいえ、子供は来て遊んでいる。子供にとってはお寺は非常に不思議な存在である。そこで子供向けの土曜学校を開催し、遊びながらお寺に親しむ環境を作っている。8月には与板の新潟別院で1泊2日の子供の集いも行っている。宗教は習慣的なもので、昔はこの家庭にも宗教に対する教育や慣習があった。でも、最近では家庭でも仏教に目を向けなくなったから、宗教習慣が薄れてきた。

青年会もあるが、なかなか人は集まらない。これは幼年時代からの家庭内での宗教教育が無いことに起因する。

一寺院の存続に関する展望

お寺は地域社会のもの、それが長い歴史の中で個人的なものになりつつある。それが、公共的なものになっていくということは、本来の姿に戻るという事であるだけ。昔はお寺と言わず、道場と言った。それは今の公民館のような意味合いであった。これだけの空間があつて、使われているのは年に何回もないことはもったいない。

どこの地方もそうだが、長岡でも、旧市内の若い人は東京の大学へ行き、東京で就職し結婚する。すると、長岡とのつながりがどんどん遠くなっていく。その子供の代になると、長岡とはほとんど関係なくなってしまう。両親が死んでしまうと、長岡の家もは処分する。お墓も遠くなると、東京に移す。特に最近の不況も関係して、帰省して墓参りというのは減っている。地震以来、その傾向に拍車がかかった。

もともと、檀家は宗教心で結ばれるべきだが、近いから、本家分家の関係があるから、など色々な事情で慣習的になっている。だが、檀家は地域社会の共同体としては尊い事。共同体なしには、農村はやっていられない。昔は9割以上が農家だったが、今ではだいたい兼業農家。お米などの値段は下がり、支出は増える。農機具は揃えるのに1千万かかる。こういう状況を、ひとりで解決する事はできないから、全体で動かなければいけない。その一方で、近年、共同体が崩壊しつつある状況が危惧される。

お寺も同じで、いかにして本来の目的を達するかということに尽きる。(一般の人達は普段は生活に追われて、人生や真理を探求することがない。そのかわりに宗教家がいて、お寺がある。そうしてお互いに支え合うしくみ。それが本来の宗教のあり方だと言うこと。)宗教心は人間の本質的なものだから、消える事は無い。これからの、日本人の宗教心に対して悲観はしていないが楽観もしていない。

ヒアリング4. 日照山 西願寺

宗派：浄土真宗高田派

所在地：長岡市呉服町1丁目1-11

ヒアリング対象者：住職 上原教仁氏

調査日時： 2010年11月9日

—お寺の由来

開基は親鸞上人の弟子、教名房。茨城の布川に草庵をつくったことが始まり。第十三世、元和三年(1617年)の時に、現在の呉服町の地に移寺。戊辰戦争の時には、一時的に本堂が野戦病院として使われたこともあった。昔の寺院は、施療院といった性格を備えていることもあったため。現在の本堂は、昭和20年の空襲で焼失。本堂が再建したのは昭和46年のこと。

—檀家について

檀家の数は、増えたり減ったりで、全体的に変化はない。しかし、今の檀家を見ると、この代で終わりという人も見かけられる。檀家の分布としては、近隣の町内もそうであるが、その他の地域にも多く分散している。浦瀬や山古志などにも。本家分家の関係などによるものだろう。

—地域社会とのつながり

戦後、お寺で習字を教えていたということはよくあった。そうすると、子供が稽古の後で境内で遊ぶ。檀家の人ではなくても、墓場から境内から、子供がそこら中で遊んでいた。周りの子供達は寺に親しんでいた。現在は子供が少なくなって、子供の声は聞こえないし、遊び場も境内ではなくなった。

昔は、檀家だけではなく、寺の行事には町内の年寄りが多く来た。お説教を聞く事が楽しみでもあった。3日間、説教者を読んで、朝、昼、夜のお経と、一日2回のお説教。それが一週間続くと、物語になる。それを聴きに、色々な人がやってきた。今はそうした娯楽はテレビなどによってかわられてしまった。町内会が、納涼会をやったりすることもあった。また、以前は呉服町の子供会の行事があった。境内のラジオ体操や、お説法を説くといったことをしていた。

現在は、浄土真宗では報恩講という行事があるが、檀家以外はなかなか来ない。だから、色々な工夫として、お経、お説法、食事以外に、落語やコンサート、紙芝居などの演目を入れたりしている。江戸時代以来の檀家制度は、今の高齢者にはまだ残っている。寺と檀家の関係は、寺と親戚よりずっと濃いものだった。

—寺院存続に関する展望

現在は、経営的な面で言えば、檀家との結びつきが大切である。が、それが薄れつつあることが、仏教界全体の危機感でもある。特にお布施か核表などの発表は、仏教のもともめているお布施

とは根本的に違った尺度のもの。寺は檀家のころぎしで、成り立っている。

七五三とか、墓参りとか、新年の行事とかに、少しは宗教行為が残っている。ゆえに宗教を聞かれると仏教と答え、それなりの宗教観は持っているが、本当の信心を持っている人は少ない。特に地方から東京へ出て行くと、長男は家を守るというような意識が薄らいでくる。そうすると先祖を守るという心も薄れてくる。葬式だと、業者を通してお寺を紹介してもらうような、一連のサービスの流れにのって、死というものが扱われる。墓はこちらに任せっぱなし。そうすると、家族が宗教行事に参加する機会がない。そうした中で、人生とは何か、といったことが問題にされなくなる。一方地方では、若い人が減り、墓だけが残る。こうした状況で、寺院には何が出来るか考えなくてはならない。

お墓は平成15年に改装した。地震の前の年にやったので、地震の時も無事だった。お墓をきれいに整備した後、若い人が訪れることが多くなった。子連れの墓参りなども増えた。

ヒアリング5. 栖吉山 普濟寺

宗派：曹洞宗

所在地：長岡市栖吉町3039

ヒアリング対象者：住職 金子氏、普濟寺世話役代表者2名

調査日時： 2010年11月10日

—お寺の由来

普濟寺は空海師の開基で、もとは真言宗の寺であった。延元三年(1338年)臨濟宗普濟寺を開基。蔵王堂城主長尾影虎が栖吉城を築いたときに、場内にある普濟寺と深い関係を結んだ。また、長岡藩初代藩主牧野忠成公の菩提寺でもある。

—檀家について

現在は150軒ほど。その内の6割ほどが栖吉町の人(栖吉町全体の1/3、残りの2/3は同じ町内の善照寺の檀家である)。普濟寺は世話役(檀家衆)が寺を支えている。先祖が大事にしてきたお寺を、守っていかなければ行けないという気持ちから、がんばっている。また、20年たらずで住職が4人変わったという背景もある。現在は、慶徳寺の住職が普濟寺の住職を兼務している。毎朝住職が通ってきている。慶徳寺は、住職とその家族で全ての運営をやっている。檀家は10軒ほどであり、対照的。

檀家としては、住職が寺に居住してもらった方がいいのかもしれないが、住職としては、プライバシーの問題がでてくる。外の人が入りにくい部分が出てくるのはよくない。これだけ大きい寺では、住職ひとりでは経営していけない。人数が集まって事業計画をたてて、力をあわせてやっを行かなければ駄目である。檀家の人は、定年退職してから、世話役として仕事をするようになる。雪下ろしとか、行事だけでは、その人達の社会経験が生きないので、経営に関わってもらおうようにしている。現在普濟寺では常に、何人かが寺に関わる仕事をしている状態である。

栖吉は、職住近接、親子で暮らせる農村であった。現在はどんどん変化して、都心や東京などへ出て行く人も増えた。しかし、それでも寺の機能を衰えないように、守っていかなければならない。曹洞宗は世襲ではないので、住職はその都度かわっていく。檀家の世話人は、先祖代々このお寺ということで、愛着がある。そこで引退した檀家には、世話役になってもらって、寺の仕事をしてもらう。

—地域社会とのつながり

曹洞宗の行事、涅槃会、成道会、花まつり、など。またお盆やお正月にも、行事がある。こうした行事も、婦人会や世話役が計画から実行まで携わっている。

子供との関わりに関しては、おじいちゃんおばあちゃんについてくるとか、暇だからとか、そういった参加である。世話人の人が子供だった頃は、だんごまきの日は学校はお休みになり、檀家じゃ

なくても誰でも来たが、今は子供も減り、初午も平日が多いので、なかなか集まらないといった状況である。子供が境内で遊んだりということもないが、そもそも今の時代、長岡市内でも、公園で子供が5人以上たばになって遊んでるのを見ることはない。

年に2、3回、小中学校、幼稚園の子達が、遠足でくると寺に集まって、スタートするといったことがある。また、山登りの市民団体が訪れることも何度かある。しかし住職が常にいるわけではないので、あまりそういったことに関与はできていない。山を登った先が栖吉城跡であるため、歴史関係の人もやってくる。そうした中で、公衆便所の話なども出るが。

一寺院の存続についての展望

お寺とは何か。お寺は、お坊さんのものでもない、檀家のものでもない。親鸞上人が、説法して回った、そういう宗教のかたちが元にある。しかし今はお寺の建物を維持するのに手一杯である。街中のお寺は、なんとなく入りづらい。防犯対策でセコムに入っていたりする。現代社会で、それは仕方がないことかもしれない。

宗教心は、もともと人の心にある。それを体系立てていくのが、宗教。それには長年の経験と修練が必要であり、それが住職の役目である。お寺の存在できる価値とは、人生の道しるべであったり、転ばぬ先の杖であったり、心の拠り所であったり。苦しみを少なくする方法を研究するところである。それが寺院の存在意義。

その一方で、環境を守っていかないと、お寺もこの地域の生活も本当の意味では残っていかないとも思う。この辺りの自然は素晴らしい。C.W.ニコルさんが来たこともある。今危惧されるのは、東山一带の素晴らしい自然が目に見えて駄目になってきていること。これは、普濟寺の檀家だけじゃなく、長岡市民全体の宝である。山だけではなく、田んぼひとつとってもそう。しかし、休耕地があつたりして維持できないのも現状。東山、鋸山、田畑、色々な景観—お寺の屋根もそうかもしれない—は、長岡全体の、みんなの財産。それが失われると、長岡の価値も失われてしまう。

栖吉一带は地震の時にはひどく揺れた。お寺の建物も損傷が酷かったが、出来る限り復元した。それも檀家の力である。古いものはそのまま残す、古い資料等残す。絶対にここにあつてはならない、と分かった時に排除すればよい。お寺は、時代に逆行しているが、そういう場所もなければならぬ。東京に行くと、自分の足跡一つのこらないが、長岡では、鋸山も、田んぼも、自分に属しているような気がする。そうした意識で、環境を守っていかなければいけない。

こうしたことは倫理の問題であり、宗教教育とは、本質はそういう部分であるはず。

長岡のお寺ヒアリング 結果概要

| 寺院名 | 龍徳院 | 徳聖寺 | 西榮寺 | 西願寺 | 普濟寺 |
|-----------|---|---|--|--|---|
| 宗派 | 禅宗 | 浄土真宗 | 浄土真宗本願寺派 | 浄土真宗 | 曹洞宗 |
| 場所 | 長岡市乙吉町3316 | 長岡市上田町2-25 | 長岡市千代栄町11 | 長岡市呉服町1-1-11 | 長岡市栖吉町3039 |
| 檀家軒数 | 100 | 400 | 370 | 150? | 150 / 10 |
| 経営形態 | 専属 | 専属 | 専属 | 専属 | 兼務 |
| 創立 | 1473年 | 1282年? | 1570年 | 1617年 | 1338年 |
| ヒアリング概要 | 山の中腹にある寺院で、禅宗様式の本堂を持つ。檀家は少なく、アクセスも不便なため、仏教行事等も廃れてきている。 | 中心部にあり境内も広い。檀家の他に、町内会との関わりも残っている。また住職は、病院、刑務所等、寺院外での活動も幅広く行っている。 | 各仏教行事の他、子供のための土曜学校、初産式などが行われている。また、雅楽愛好会の主催、コンサートの主催なども行っている。 | 中心部にあるが、地域との関わりは薄い。行事への参加も、檀家の足は遠のきつつあるという。一方で、墓所を整備したところ墓参りに来る人は増えたという。 | 普濟寺は3代住職がおらず、世話人が中心となって寺を支えてきている。現在は慶徳寺の住職が、普濟寺の住職を兼任している。 |
| 昔の境内の使われ方 | 仏教行事（地域全体で）、遊び場 | 薬師堂が近隣公園として、仏教行事、地域の祭り、 | ラジオ体操、遊び場、各種仏教行事 | 遊び場、仏教行事、地域のお祭りや縁日、習字教室 | 仏教行事、遊び場、各種会合 |
| 地域社会との関わり | 仏教行事 | 仏教行事、地域の会合 | 土曜学校、仏教行事、コンサート、雅楽愛好会 | 仏教行事 | 各種会合、仏教行事 |
| 将来展望 | 檀家の減少だけでなく、少子高齢化や地域社会とのつながりの弱体化には非常に危機感を抱いている。今までの寺院のあり方では、駄目だと感じているが、世襲制ではないこともあり、どうしたらいいかわからないという。また、建物の保全や改修に対する公的助成制度を、どうにか作れないか。 | 檀家はあと20年もすれば、今の半数くらいになるとみている。しかし、宗教家の仕事は寺の中だけでは足りない。近々薬師堂を再建したいと考えている。寺院の経営や存続に関しては悲観していない。 | 檀家の減少は目に見えている。宗教心の希薄化に関しては、今も昔も変わらないと見ており、楽観も悲観もしていない。しかし、地域社会とのつながりがお寺本来のあり方への回帰は重要であると考えている。 | 特に子供の減少は著しく、檀家の減少、寺院への不信感など、寺院存続への不安要素は大きいという。本堂を地域に提供する事で、宗教心へのきっかけとなればよいと考えているが、具体的な方策はない。政教分離もあって、難しいと見ている。 | 檀家の減少、少子高齢化は非常に危惧するところであり、また今のお寺の状態（維持管理の問題と、本来は誰にでも開かれていたはずであることとの矛盾）も、改善されるべきだと考えている。しかし、重要視していることは、寺院や集落を含む、環境だと考えている。自然環境の保全、環境教育などを行うべき。 |

以上の、ヒアリングをまとめると、次のようになる。ヒアリング1の龍穩院は、郊外の集落地域に立地し、檀家が減少している点、アクセスが不便である点などは、存続の危機にある典型的なケースであると言える。ヒアリング2の徳聖寺は、中心部の駅近くに立地し、檀家数もヒアリングした寺の中では一番多かった。だが、境内や本堂がかつてほど地域の人に使われていない点は、改善点であり、かつての近隣コミュニティーの場であった薬師堂の再建を目指している。ヒアリング3の西楽寺は、郊外に立地し、檀家の減少や寺離れを危惧する一方で、雅楽同好会の主催や本堂でのコンサート主催などによって、檀家以外との繋がりを保っていた。ヒアリング4の西願寺は、中心部に立地するが、地域社会とのつながりが薄れ、その回復を模索している寺であった。ヒアリング5の普濟寺は、檀家が寺を存続させるために試行錯誤しており、今後の寺院の存続形態を考える上で、大変示唆に富むものであった。

全体的な傾向としては、檀家の減少と、檀家の寺離れに関しては、どの寺院も同様の状況であった。これは、長岡地域での一般的な傾向であると考えてよいだろう。また、墓だけ故郷に残すが檀家としての関係は希薄化してしまう、という若年層の都市部への移転がもたらす問題については、2章で触れた葬儀の多様化や「無縁死」の問題につながるものであった。また、どの寺院も、かつては地域社会のコミュニティーの一角を担っていたことが確認された。そして存続の展望としては、地域社会とのつながりを再興すること、そして境内や寺院が有効活用され、それをきっかけに寺に人が戻ってくることに、については熟考の価値有りということであった。

以上の寺院関係者からのヒアリングでは、次のことが明らかになった。

1. 寺院本堂及び境内は、近年までは子供の遊び場であり、地域に開放されたものであった。また、行事等もかつては大勢の参加が見られたが、現在は檀家だけとなっている。
2. 信仰心が希薄化したわけではなく、様々な社会構造の変化によって幼少期からの宗教教育が失われてしまったことに、現代人の宗教離れ、檀家の寺離れがある。
3. 寺と檀家の関係は、特に若年層の都市部への移転によって弱体化している。
4. 檀家数は、将来的に減少の見通しである。
5. 寺院の存続に関する、現状打開策はまだ明確ではない。だが、地域社会とのつながりは大切である。